村芝居（魯迅作品日文版） PDF转换可能丢失图片或格式，建议阅读原文
https://www.100test.com/kao_ti2020/245/2021_2022__E6_9D_91_E8_8A_9D_E5_B1_85_EF_c105_245733.htm わたしが支那（しな）の芝居をたのは去二十年にたった二度だけであった。前の十年はになかった。またようという意思も会もなかったから、その二度はどちらも後の十年のうちで、しかもとうとう何の意味をも出さずに出て来たのだ。 第一は民国（みんごく）元年、わたしが初めて北京（ペキン）へ行った、ある友から「ここの芝居は一番いいから、以て世相をてはどうかナ」と言われて、「芝居物も面白かろう、まして北京（ペキン）だもの」と大（おおい）にじてすぐに何やらとかいうへ行ったら、もう世物が始まっていて、小屋の外には太鼓のがれていた。わたしどもは木口を入ると、赤いものだの、青いものだの、つも眼の前にキラめいて、舞台の下にたくさんのをたが、よくをつけてなおすと、まん中にまだつかの空席があったから、そこへ行って坐ろうとした、わたしに向って、何か言った者があった。最初はガンガンという（どら）の音で、よくえなかったが、注意してくと、「人が来るから、そこへ坐ってはいけない」というのだ。 わたしどもはぜひなく後ろへ引返して来ると、子（べんつ）のぴかぴか光った男が、わたしどもの（そば）へ来て一つの所を指さした。その所はい腰で幅はわたしの上腿（じょうたい）の四分の三くらい狭く、高さは下腿（かたい）の三分の二よりも高い。まるで拷の道具に好く似ているので、わたしは思わずぞっとして退（しりぞ）いた

。二三あるくと、友が、「君、どうしたんだえ」とわたしのあとから跟（つ）いて来た。「なぜ行（ゆ）くのだ。返辞（へんじ）をしたまえな」「いやどうも失敬、なんだかドンドンガンガンして、君のいうことはサッパリえないよ」 あとで考えてみると、全くなことで、この芝居はあまり好くなかったかもしれない。でなければわたしは舞台の下にじっとしていられない（たち）なんだろう。 第二はいつのことだか忘れたが、とにかく湖北（こほく）水捐（ぎえん）金を募集して叫天（たんきょうてん）がまだ生きている分だ。その募集の方法は、二元（えん）の切符をって第一舞台で芝居物をするので、そこに出る役者は皆名人で、小叫天（しょうきょうてん）もその中にいた。 わたしが切符を一枚ったのは本来、人のめに依っため塞げであったが、それでもか、叫天の芝居はておくものだ、といったことがあったらしく、前年のドンドンガンガンのも忘れてつい第一舞台へ行ってるになった。まあ半分は、高い（あたい）を出した大事の切符を使えばがむのでもあった。 わたしは叫天の出る幕がいといていたので、第一舞台は新式のだから座席を争うようなことはあるまいと、わざと九までをしてやっとこさと出て行った。ところが、その日も相らず人が一杯で、立っているのも六ツかしいくらい。わたしは仕方なしに後方の人（ひとご）みに揉まれて舞台をると、ふけおやまが歌を唱（うた）っていた。その女形（おんながた）は口のに火のついた捻（こより）を二本刺し、に一人の卒（らそつ）が立っていた。わたしは散々考えた末、これは目（もくれん）の母らしいな、と想った。あとで一

人の和尚が出たからがついたので、さはいいながら、この役者がであるかを知らなかった。そこでわたしの左に押されて小さくなっていた肥えた士にいてみると、彼はさげすむような目付でわたしを一目て、「甫（こううんほ）」と答えた。わたしはひどく（きま）りがくなってがほてって来た。 同にの中で、もうして人にくもんじゃないと思った。そこで子役をても、女形（おやま）をても立役（たてやく）をても、どういう（たち）の役者が何を唱っているのか知らずに、大が入り乱れたり、二三人が打合ったり、そんなことをているに九から十になった。十から十一半になった。十一半から十二になった。――そうして叫天はとうとう出て来なかった。 わたしは今まで何事に限らずこんなに我慢して待ったことはなかった。いわんやわたしのにいた士はハハ息をはずませて肥えた身体（からだ）を持てあましていた、舞台の上のどんちゃん、どんちゃんの（はやし）や、（あか）やのまぶしいキラめき。その十二だ。たちまちわたしはとてもこんなにいられないと思った。同にわたしは械的に身を捻（ねじ）って力任せに外の方へと押出した。後ろは一杯の人で通る路（みち）もなかったが、大概その力性に富んだ肥えた士が、早くもわたしのけ出したあとに、彼の右半身を突んだので、わたしは自然に押され押されて木口に出てしまった。 街は客の以外にはほとんど一人も通行人がなかった。それでも木口には十何人かを昂（あ）げて芝居の番附（ばんづけ）をていた。外に一かたまりの人が、何にもずに立っていた。わたしは何にも知らずに来たことを我れながら悔んだが、局芝居の目さえも

忘れてしまった。わたしがいい芝居をたのは、それよりずっと前の事だ。そのおそらくまだ十一二にもならなかったろう。わたしども（ろちん）のは、およそでも嫁に入（い）ったむすめは、まだ当主にならないうちは、夏のたいていは里方に行って暮すのである。その分わたしの祖母はまだ者であったが、母もいくらか家事の手いをしていたので、夏もくっていることは出来なかった。ぜひなく墓除をすましたあとで、二三日の暇をてけ出して行（ゆ）くのであった。わたしは母に跟いて外（がい）祖母の家（うち）にびに行ったことがある。そこは平村（へいきょうそん）と言って、ある海岸から余りくもないごくごく偏僻（へんぴ）な河添いの小村で、数がやっと三十くらいで、みな田を植えたり、を取ったりそういう暮しをしているに、ただ屋が一あるだけであったが、わたしに取っては世界であった。ここへ来れば待されるのみか「秩秩斯干幽幽南山（チチスハンユウユウナンシャン）」などというものをらなくともいいからである。わたしと一にぶいろいろの小さな友が客が来たので、彼等もまた父母のしを得て、仕事を控えてわたしのお相手をした。小村の中の一家の客もほとんど大概芝居のハネたあとの女をに行くことを考えていた。しかし叫天はそこにもやッぱりいなかった…… さはさりながら夜の空は非常に爽（さわや）かで、全く「人の心脾（しんひ）に沁む」という言通りで、わたしが北京（ペキン）に来てからこのないい空に遇ったのは、この芝居りの外（ほか）にはなかったようにもえた。この一夜（ひとよ）はとりもなおさず、わたしが支那芝居に告をした一夜で、もう

一度そんなことに遇おうとも思わず、たまたま芝居小屋の前をぎても、わたしどもとはまるきりがなく、精神がすでに一つは天の南にあり、一つは地の北にあった。 けれどもその二三日前にわたしは思いがけなくある日本の本をんだ。惜しいことには本の名前も著者の名前も忘れてしまったが、とにかく支那芝居にすることで、その中の一篇をかいつまんでいうと、支那芝居はに叩き、暗に叫び、暗に踊り、客のを昏乱（こんらん）させるから、向きではないが、野（のびろ）いところでくの方からていると、自然に面白味がわかって来るといてあった。わたしはそのそう思った。これはいつもわたしの胸の中にあってまだ言い出したことのない言だと。だからわたしはいい芝居は野外でられるものと、しっかりえていた。北京（ペキン）へ行ってからも芝居小屋に二度入ったが、やッぱりあのの影を受けたのかもしれない。何しろこれは公共のものではないか。 わたしどもは年もおつかつだったが序から言えば一番下の弟だ。外（ほか）に人も目上の者がある。村じゅうは皆同姓で一家であった。そうはいうもののわたしどもは友だ。喧でもして年上の者を打つと一村の者は老人も若い者も、目上という言を想い出せない。彼等は百人中、九十九人は字を知らなかった。 わたしどもの日々の仕事は大概蚯蚓（みみず）を掘って、それを金につけ、河添いにけて（えび）をるのだ。は水の世界の鹿者で会もなしに二つので（はり）の尖（さき）を捧げて口の中に入れる。だから半日もたたぬうちに大きなに一杯ほど取れる。そのはいつもわたしが食べることになるのだ。その次は皆と一に牛をうのだがこ

れは高等物のせいかもしれない。黄牛（おうぎゅう）も水牛も空をつかってわたしを鹿にする。わたしはへゆくことが出来ないでくの方で立っていると小さな友はわたしが「秩秩斯干（チチスハン）」がめることなど著（とんじゃく）なしに寄ってたかって（はや）し立てる。100Test 下载频道开通，各类考试题目直接下载。详细请访问 www.100test.com